

日本の将来にとって不可欠な 「英語」のすゝめ

An Exhortation to Speak English Indispensable for the Future of Japan

副会長 中沢正隆



最近の無線通信，光通信などの発展は目覚ましく，インターネットやスカイプなどグローバルな情報通信ネットワークによって海外の人と簡単に情報交換できる時代になってきている．その際用いられている言語は英語がほとんどである．また，最近では日本を訪れる外国人観光客は2,000万人を超え，更に伸び続けている．英語を話す観光客が地方の観光地にも多く訪れるようになり，そうした人たちとのコミュニケーションもますます重要になってくるであろう．

今や時間や空間的な地図は塗り替えられ，バーチャルには日本は欧米と陸続きであり，もっと英語を使う日常生活があってもよいと思う．特に若い人たちには英語を自分のツールとしていつでも使えるようになってほしい．明治維新のときもそうであったように，若者には積極的に海外に飛び出して異文化を学び，得られた知見を自らの感性と融合させて新たな文化で新たな日本を創り出していくことが求められている．日本人は恥ずかしいと思うことが多いせいか，英語を積極的に学んで外国人と交流することに前向きではない文化が根付いているように思われる．しかし，例えばインドネシアや香港などでは母国語のように英語に慣れ親しんでいる．日本にもできないわけがない．例えば英語を学び始めるのが小学校や幼稚園でもいように思うし，日本語がおろそかにならない範囲で小さければ小さいほどずっと覚えられるであろう．下世話な話ではあるが，日本の大学や企業の世界ランキングももっと向上するであろうし，日本の学会もその特徴を世界にアピールして生き残れるであろう．

また，今後少子高齢化する社会で，将来日本の産業を維持発展させるためには海外からの優秀な労働者の雇用も大きな課題となってくる．そのような折，日本人と外国人の一体感を醸し出せるように，すなわち日本のために親身になって働いてもらうためにも細かい意思の疎通が重要である．ここにも英語の重要性がある．

私にも英語を懸命に学んだ経験があり，それが今日に至っても役立っていることをお話ししたい．私が31歳の頃MITのRLE (Research Laboratory of Electronics) に留学する機会があった．その研究室にはイタリアや中国からの留学生がおり，先生も国際的に著名な先生で，超短パルスレーザ，光ファイバ中の非線形光学，光伝送などについて研究した．よかったのはいろいろな人と討論する中で，友達ができ多くの先生方とも知り合うことができたことである．滞在したのはたった1年であるが，そこがスタート点となって30年以上たった今でも先生方との技術交流ができています．実は内輪の話であるが6年前に学内のプログラムに応募し，大変高い競争率の中，重点戦略支援プログラムの一つとして「東北大学電気通信研究所—MIT 電子工学研究所国際共同研究プロジェクト (RIEC-RLE Project)」に採択された．30年以上も付き合いのあるMITの先生に東北大学との共同研究をお願いしたいとお話ししたところ，喜んでやりましようと言って頂いた．6年にわたって両組織から10人以上の教授がボストンと仙台を訪問し合い，ホットな研究連携を行った．よかったのは，電気通信研究所だけでなく多くの他部局の研究者も参画して全学的に研究連携が広がり，また准教授やポスドク，ひいては大学院学生の交流も行うことができた．MITの学生が東北大に来て，東北大の学生がMITで実験をした．そして両者の交流協定も結ぶことができ，今後学生や研究者の交流をお互いにサポートすることになった．このような連携ができたのも，若い頃の留学が起点になっている．人それぞれいろんな形で将来の自分の道を豊かなものにするためにも，是非海外へ羽ばたくことを期待したい．